

わたしの * 勉学時代 *

宇都宮大学長

石田朋靖先生に聞く

思い通りにいかない時でも
「まずはやってみる」ことで
必ず新しい道が見えてきます。

農学部と学芸学部(現在の教育学部)の2学部でスタートし、現在は5学部を有する宇都宮大学では、宇都宮プリット「3C精神」を大切に、学生と教職員が一体となって未来を切りひらいていくことを目標としています。今回は、2015年4月に学長に就任された、石田朋靖先生にお話を伺いました。研究者時代、思うようにいかないこともあったという先生。どうやって未来へと進んでこられたのでしょうか？

石田先生と一緒にカメラに収まっているのは、大学オリジナルキャラクターの「宇〜太」です。

石田朋靖 (いしだ・ともやす)

1955年生まれ。群馬県出身。農学博士。1978年東京大学農学部農業工学科卒業後、東京大学大学院農学系研究科博士課程修了。83年8月より山形大学農学部助手として勤務。その後、同大学にて助教を務める。92年より宇都宮大学農学部助教授、2000年より同教授。国立大学法人宇都宮大学評議員、農学部長、理事などを経て、15年4月より同学長に就任、現在に至る。専門分野は農業環境工学、生物環境物理学。第18回尾瀬賞を受賞(研究テーマ：熱帯泥炭湿地の環境特性と泥炭保全管理指標の定量化)。

将来の夢は「石屋さん」

群馬県には、かつて鬼石という町名がありました。現在は藤岡市に編入されています。群馬と埼玉の二県にまたがる神流川のちよど谷口付近にありました。この鬼石が、私の生まれ育った土地です。自然豊かな里山であり、昭和30年代はまだ戦後の雰囲気の色濃く残っていました。

鬼石は三波石という庭石の産地です。神流川上流には三波石峡という景勝地があり、国の名勝、天然記念物に指定されています。三波石は全体が青緑色をしていて、そこに白い縞模様が入っているのが特徴で、昔から庭石として高値で売り買いられていました。鬼石の人々は、その高価な三波石を庭木と一緒にトラックの荷台にめいっぱい積み込んで、東京まで造園に行っていたんです。高度経済成長期の日本は建設ラッシュ



家の手伝いで重たい金物運んでいたのですが、今でも上半身の筋肉はそれほど衰えていません。釘が1箱で25kg、これを小学校高学年になると両手で2箱運んでいました。

で、新しい家が次々と建てられました。そうしたところに需要があったのです。夜中になると大きなトラックが何台も東京に向かって走って行きます。そして数日後に石を売り切つて帰って来る。子ども心に華やかな職業に見えていました。小学校の頃などは多くの級友が「将来は石屋さんになりたい」と言っていたものです。

そんな私の実家は、石屋ではなく金物屋でした。生活金物から建材金物、鋸や鉋などの道具まで幅広く取り扱っていました。兄と姉はもちろん、末っ子の私も仕事を手伝ったものです。両親を手伝うのは当然だと思っていました。

私は何を手伝っていたかというツケの回収です。当時、支払いは月末などにまとめていました。小学生が町内の家々を回ってツケを支払ってもらい、自分で領収書を切るわけです。そして、集金した合計から1%を自分の小遣いにするのが許されていました。千円だったら10円ですね。月に1万円を集金すれば1000円の小遣いになり、当時の子どもにとってみればなかなかの収入になりました。振り返ってみると、働いた分だけ収入を得る仕組みはとても良い教育であったと思います。また、そろばん教室に通ったこともあり、計算は得意でした。

人から喜んでもらうこと

幼い頃の出来事で印象的だったものの一つに、祖母とのやり取りがあります。明治時代の生まれだった祖母は、大変厳しい人でした。その祖母に「働くことは金儲けではない」と教えられました。「人様の役に立って喜んでもらうことを、働くことだ。その結果として収入があるのだ」という言葉は、今でも鮮明に覚えています。私の原点となった教えです。

よくいる田舎の小学生という感じで、川で泳いだり、神社の境内で遊んだり、のんびりと過ごしていました。両親や祖母に勉強について厳しく言われたこともありませんが、中学生になってもそれは変わりませんでした。テストの結果にはこだわっていません。そこにはプライドのようなものがあつたからです。田舎ですので、私が金物屋の息子であることは誰もが知っていました。だからこそ「あの家の末っ子は出来が悪い」と思われるのがいやだったので、勉強でいいいますと、算数や数学、理科は好きでした。一方で暗記物の英語や社会科は苦手でした。

中学校では生徒会の副会長を務めました。その顧問をされていた先生から、卒業時にカミュの小説『異邦人』をいただいたことを

宇大スピリット「3C精神」

宇都宮大学が大切にしている宇大スピリット「3C精神」。3Cには、Challenge（主体的に挑戦し）、Change（時代の変化に対応して自らを変え）、Contribution（広く社会に貢献する）という意味が込められています。学生と教職員が一体となって、明るい未来を切りひらいていくキャンパスの雰囲気は伝わる、ステキな言葉ですね。教員1人あたりに学生はおよそ3人ということで、親身できめ細やかな教育を実現する同大学。「浴びる英語」をテーマにした『EPUU（基盤教育英語プログラム）』や、石田先生と直接意見を交換し合える『学長ティータイム』など、独自の取り組みも魅力です。



「3C精神」を紹介する宇～太。後ろのフランス式庭園は、峰キャンパスにある登録記念物（名勝地）です。宇～太の部屋（<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/utility/u-taroom.php>）もぜひチェックしてみましょう！

PRESENT



宇都宮大学オリジナルグッズ（宇～太クリアファイル・缶バッジ・消しゴム、「宇大トリビア集」、学校案内等）を3名の方にプレゼント。投稿用ハガキで申し込んでください。

高まり、砂漠の緑化への試みも話題になっていて、「人の役に立つ」分野として興味はますます深まっていきました。

東京大学の理科二類に入学した後も、いろいろと進路に迷いがありました。友人たちと議論をしながら自分のやりたいことを模索した結果、やはり「人のために役立つことがしたい」と思い至りました。そこで志望したのが、かねてから興味があった砂漠の緑化研究にもつながる農業土木の分野です。ところが、それに関連する研究室は競争率が高く、ジャンケンに負け残念ながら入れませんでした。

こうしたいきさつで、土と水の基礎研究に携わるようになったのですが、実際に始めてみると大変興味深い分野であることがわかりました。常に研究のことが気がかりで、大学院時代は作業をする必要がない時

でも、家にいるより大学にいたほうが安心するほど没頭しました。研究者時代は、モデルのシミュレーションの結果と現場の状況が一致しなくて、眠れない日々が続いたこともあり。そんな時、「机上の計算ではなく現場を見て学びなさい。現場には課題も解答も隠されている」と上司に背中を押していただき、エジプトや中国の砂漠、さらには東南アジアの水田や熱帯林の調査など様々な場所に同行させてもらいました。この経験が、幅広く地球環境への興味につながっていきました。とても有り難かったですね。

「まずはやってみる」の精神

博士号を取得した時、恩師から「学位とは、単に学んだということの証だけではな

く、位がついてくる。それはつまり、君の人間としての品位・品格が問われているということ。それを忘れないように」という言葉を読んだとき、学問によって人間性が高められるということを、皆さんもぜひ心に留めておいていただきたいと思っています。

これからの人生、思う通りにいかないこともあろうでしょう。そんな時でも、歩き続けてさえいれば、必ず先に進めます。かつての私がそうだったように、どこかには辿り着けます。そこには、思いもしない新しい道があるかもしれません。また、思い通りにいかないことを経験すれば、視野が広がり、世界の見え方も変わってくるかもしれません。「人に役立つ」というビジョンと「まずはやってみる」の精神が、皆さんを変えてくれるはずです。困難にぶつかっても、きつと大丈夫ですよ！

模試対策のため机に向かう



中学時代に読んだ本の中では、マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』が特に好きです。激動の時代をたくましく生きる女性の姿に感動しました。

勉強に身を入れたしたのは、中学2年生の3学期からです。3年生から毎月模試を

受けることになり、その結果は順位となつて共有されると知りしました。「恥ずかしい順位になつたらいやだな。高校でもしっかりと勉強したいから、良い成績を残さないと」と思い、次年度へ向けて1月あたりから机に向かうようになったのです。ところが、ここで思わぬ困難にぶつかりました。一言で表すと、勉強の仕方がわかりませんでした。それまでは定期考査対策ばかりで、直近の授業内容を復習すればよかったのですが、模試では中学3年間すべてという途方もない広範囲に対応しなければなりません。何とか教科書や問題集を頼りに手探りで勉強を続けたところ、3年生の4月の半ばにあった模試で県内トップクラスの成績をおさめることができました。とても嬉しかったのですが、「一発屋と思われないうちに、もっと勉強しなければ」という変なプレッシャーになりました。それが結果として成績キープにつながったのですが、模試は大嫌いなイベントでした（笑）。

高校は群馬県立高崎高等学校に進学しました。県内きつての進学校でしたが、ゲタをはいて通学する旧制中学校以来の自由な雰囲気を持つ男子校で、大変過ごしやすかったです。数学部に入り、時間があれば部室で仲間と過ごしました。数学部とは名ばかりで、部室ではトランプや将棋をする

のが主で、楽しかったですね。いろいろな議論を交わしたりもしました。

没頭できる分野との出会い

大学受験の際、理科は物理と地学を選択しました。地学の授業は特に面白かったです。プレート理論を知って「地面が動いているなんて、大変なロマンだ！」と感動したことも覚えています。この時の感動が、後の研究につながっていきました。また、映画『アラビアのロレンス』を観て、砂漠の美しさにすっかり魅了されたことも大きかったですね。同じ頃にジャーナリストの本多勝一さんが書かれた『アラビア遊牧民』を読み、砂漠に暮らす人々との大きな違いにカルチャーショックを受けたことも一因になりました。当時は環境問題への関心が



高校時代の友人たちと、秋の天神平（群馬県）にて。右が石田先生。